郡山市立富田中学校
学校だより
No.41

手をたずさえて

“富中PRIDE”～自信と誇り～

- 自ら学ぶ生徒
- 正しく行動する生徒
- 健康でたくましい生徒

平成３１年１月８日（火）発行
【発行責任者】郡山市立富田中学校長　熊 坂　　洋

保護者の皆様へ　2019年

新たな年のスタートです。良き年になりますように…
今年もよろしくお願いいたします！！

新たな気持ちで新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。
短い冬休みでしたが、現在のところ事故の報告もありません。ご家庭でのご支援ありがとうございました。さて、いよいよ３学期がスタートしました。３学期は短くあっという間ですが、各学年の締めくくりの大切な学期でもあります。生徒には「今しかできないこと」「今だからできること」を頑張り、悔いを残さないよう過ごして欲しいと願っております。元号が変わるという大きな節目となる2019年。保護者の皆様におかれましても、どうか本年も本校教育活動に対するご理解とご協力をお願いいたします。

『人間万事“塞翁が馬”』

『人間万事“塞翁が馬”』（にんげんばんじ“さいおうがうま”）… この言葉、聞いたことがありますか？
意味は、人生における幸不幸は予測しがたいということ。幸せが不幸に、不幸が幸せにいつ転じるかわからないのだから、安易に（簡単に）喜んだり悲しんだりするべきではないということを意味する中国の故事です。
この『人間万事塞翁が馬』は、2012年にノーベル生理学・医学賞を受賞した、京都大学の山中伸弥教授の座右の銘でもあります。山中教授の受賞業績は、人類の未来に大きく貢献するであろう、新型万能細胞、いわゆる「ｉＰＳ細胞」（神経や筋肉などいろいろな体の部分になることができる細胞で、我々が病気やけがをしたときに、復活させてくれるすごい細胞）ですが、その道のりは決して平坦なものではなかったのです。
山中教授は、大学時代、ラグビーに打ち込み、けがが絶えなかったと言います。けがを治す医師の姿にあこがれ、整形外科医を志しました。山中教授の言葉です。
「けがというネガティブなことから人生の目標ができた。人生は『塞翁が馬』という言葉を意識するようになった」（けがという不幸が、医師の道をめざすという幸運に転じた、ということです。）
しかし、山中教授は、ここで大きな挫折を味わうことになります。うまくやれば２０分の手術が２時間かかったというから、よほど不器用だったのでしょう。邪魔で足手まといの“ジャマナカ”と、先輩医師からは残酷なあだ名までもらいました。そして、山中教授は、整形外科医の道をあきらめ、病気の原因などを追究する基礎医学の道に自分の活路を求めました。やがて、ｉＰＳ細胞の作製を2006年に発表してから、６年でノーベル賞をスピード受賞したのです。
「成功するには、その前に平均して９回は失敗しないと、うまくいかない。振り返って人生全体でも、実験でもそうだ。失敗すればするほど幸運が来る」
山中教授のこの言葉は、まさに『人間万事“塞翁が馬”』を表しています。

人間はだれでも、長い人生の中、必ず失敗を経験します。いや、人生は失敗の連続なのかもしれません。大切なのは、失敗に対するその人の態度や姿勢だと思います。
失敗すると、意気消沈して、もろくくずれてしまう人
「どうせいいや」とあきらめ、逃げてしまう人
逆に、その失敗を踏み台にして、より以上に頑張ろうとする人
きみたちは、どのタイプでしょうか？

失敗に学ぶという姿勢、そして自分をふるい立たせていく強さということを、今のきみたちに是非考えてほしいのです。

山中教授の座右の銘である『人間万事塞翁が馬』という言葉は、自分の失敗にどのように向き合い、どんな姿勢で、どんな気持ちで対処していけばよいのか、ということを示唆しています。

失敗をしたら、その失敗の原因やその意味をしっかり考え、受け止めること。決して人のせいにするのではなく、自分自身をしっかり見つめながら受け止める。そして、あきらめないこと。これを繰り返し、積み重ねていくことで、目標達成や成功といった幸せに少しずつ近づいていくことができる。さらに、その経験は、強さやたくましさとなって、自分に備わっていく。失敗を幸運にすることができるかできないか、その鍵はまさに自分自身の心の姿勢にあるのです。

そして、自分自身の心の姿勢を決めるものは、何だと思いますか？

それは、「目標」、「自分がめざすもの」があるかないかです。

確かな「目標」、「自分がめざすもの」を持ち続けていけば、やがて、それは「信念」になります。そして、数々の失敗経験を経ながら、より強い「信念」となり、それが自分自身の心の姿勢となって、失敗を幸運に変えていくのだと思います。山中教授に「失敗すればするほど幸運が来る」と言わしめたのは、彼の万能細胞作製への強い信念だと思います。

昔、いつも屋根に上り、空を眺めている生徒がいました。「趣味は？」と聞いたら、「屋根に上ること」と答えました。ある日、家庭訪問した時も、彼は屋根の上にいました。「なぜ、屋根なんだ？」と聞くと、彼は、「先生、僕は空が大好きなんです。だから屋根に上るんです。いつか、この空の中に自分の身を置くような仕事をしたいと思います。」と言いました。その時、私は「えっ、何？」としか言えませんでした。

彼は、今、ジャンボジェット機のパイロットです。パイロットになるということは、数々の難しい試験や訓練をクリアしなければなりません。英語もマスターしなければなりません。ものすごい努力があったんだろうと推察することができます。そして、きっと、たくさんの失敗や挫折を経験してきたのだと思います。でも、彼はそんな時、きっとどこかの屋根や屋上に上って、空を見ていたのだと思います。山中教授のノーベル賞受賞のニュースが流れた時、ふと彼のことを思い出しました。

さて、３年生のみんな、いよいよラストスパートですね。この１・２ヶ月の生活や学習が、まさに自分の進路目標達成に直結していくものと肝に銘じ、時間を大事に過ごしてほしいと思います。１・２年生にも、一年後、二年後には必ずその時がやってきます。また、日々の生活・学習、生徒会活動や部活動などにもあてはまることです。

何度失敗しても、打ちのめされても、くじけず、負けずに、あきらめず、立ち上がり、前を向いて歯を食いしばりながら一歩一歩進んでいきましょう。その原動力になるのが、自分自身の心の姿勢であり、明確な目標や自分がめざすものです。それを決め、そして、持ち続けることです。

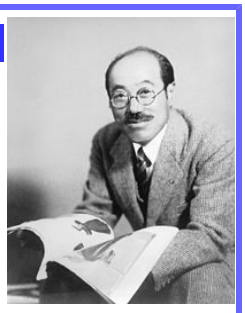
『人間万事“塞翁が馬”』…心に留めておきたい“いい言葉”だと思います。

～第３学期始業式 校長式辞より～

髙橋さん“三汀賞”受賞!!

「三汀（さんてい）賞」とは、郡山ゆかりの作家・俳人である久米正雄の俳号「三汀」にちなみ、郡山市・郡山市教育委員会・こおりやま文学の森資料館が主催し、広く俳句を募集するもので久米三汀自身を顕彰するとともに、その俳句に対する情熱の継承を目的として設定されたものです。毎年、一般・中学生・小学生の３部門を設定し、部門ごとに三汀賞（最優秀賞）１名、優秀賞２名、佳作３名、はなかつみ賞１名などが選ばれます。全国からの応募があり、今年度で19回となります。この中学生部門の最高賞「三汀賞」を３年髙橋奈々さんが受賞しました。奈々さんは百合子賞佳作も受賞しており、今回は俳句で最高賞に輝く偉業達成です。受賞作は次の作品です。

久米正雄について



久米正雄は長野県生まれ。６歳で母の実家のある郡山に移る。開成小、金透小、安積中学校（現安積高校）に学ぶ。中学時代に俳句を学び「三汀」と号した。その後第一高校（現東京大学）に入学。同期の芥川龍之介、菊池寛等と第３・４次「新思潮」を発刊した。さらに夏目漱石門下となる。『破船』や『月よりの使者』、『学生時代』等の作品が有名であり、大正期を代表する作家となった。

夏帯をしめて父の背追いかける

No.38でも紹介した詩「赤酎」にも似た父親への想いを、風情豊かに17文字で表現した秀作です。表彰式は２月３日に行われます。後日その模様を掲載します。奈々さん、おめでとう！